

か かん けん 河環研だより



ドッコ

- 1 渓流魚の増殖方法が多様化します
- 2 アユのエドワジエラ・イクタルリ感染症にご注意ください
- 3 生物多様性に配慮した水田魚道の評価に取り組んでいます
- 4 カジカ養殖研究会を開催しました

1 渓流魚の増殖方法が多様化します

漁業協同組合による渓流魚(アマゴ・ヤマメ・イwana)の増殖事業では、これまで稚魚放流が主要な方法として実施されてきましたが、近年、発眼卵埋設・親魚放流(関連記事:河環研だより16号)・人工産卵場造成(関連記事:河環研だより14号)などへの関心が全国的に高まっており、増殖方法の多様化が進んでいます。

県内では今のところ、放流種苗は稚魚や成魚が主体ですが、今後は、発眼卵や親魚(秋季の抱卵メス)の需要が高まる可能性があります。養殖業者の方々には、漁業協同組合からの発眼卵や親魚の注文に、無理のない範囲内で対応していただければ幸いです。

なお、養殖場では、通常は必要量の発眼卵や親魚しか保有していないため、急な注文に応じることは困難です。発眼卵や親魚の購入を検討中の漁業協同組合の方々には、十分な時間(半年くらい前から)の余裕を持って養殖業者にご相談くださるようお願いいたします。(下呂支所 岸・徳原)

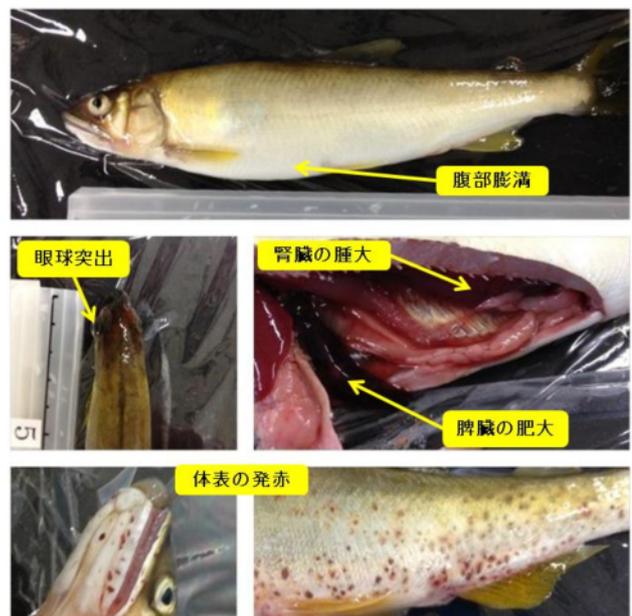


2 アユのエドワジエラ・イクタルリ感染症にご注意ください

エドワジエラ・イクタルリは、ナマズ類の疾病として世界的に広く蔓延している細菌感染症の原因菌であり、岐阜県内では平成20年の8月及び9月に河川で採捕されたアユよりはじめて分離されています(関連記事:河環研だより第12号)。平成22年までは、県内で同感染症によるアユの目立った死亡は確認されませんでした。平成23年、平成24年と、県内の河川において同感染症によるアユの死亡事例が確認されるようになりました。

同感染症が発生すると友釣り漁が不漁になるなどの悪影響が生じますのでその蔓延を防止する必要があり、そのためには、原因菌であるエドワジエラ・イクタルリを持ち込まない或いは持ち出さないように、関係者が一丸となって取り組む必要があります。そこで岐阜県では、放流アユの保菌検査を実施するとともに、同感染症の蔓延状況の実態調査を実施しております。

エドワジエラ・イクタルリに感染したアユの中には、体表の発赤、眼球の突出、腹部の膨満などの外観症状や脾臓の著しい肥大、腎臓の腫大、腹水の貯留などの内部所見を示すアユが散見されます。また、同感染症はアユ以外の魚種においても発生する可能性があります。漁業協同組合や養殖生産者の方々には、高水温期の異常なへい死にご注意いただき、異常を発見しましたら、河川環境研究所または県農政課水産振興室までご連絡いただきますようお願いいたします。(資源増殖部 武藤)



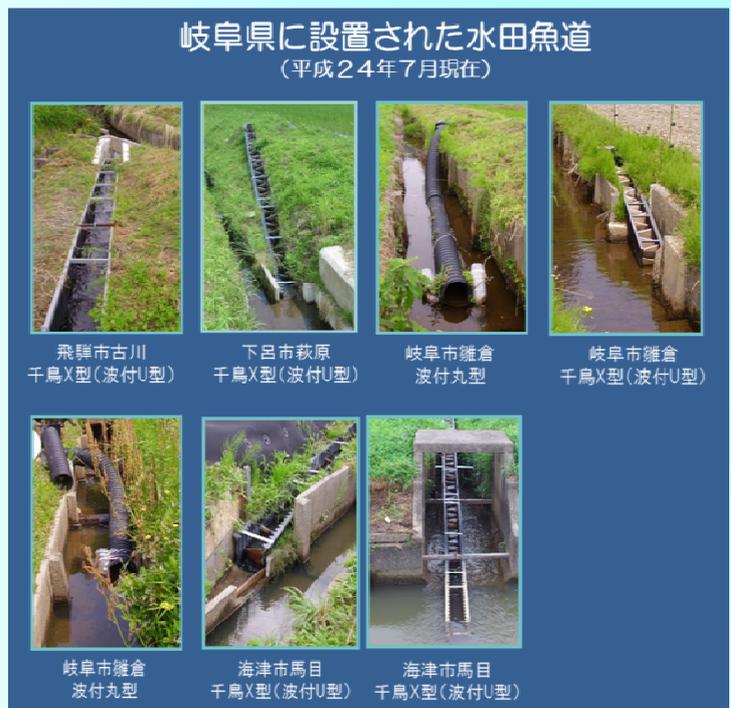
3 生物多様性に配慮した水田魚道の評価に取り組んでいます

国連の“地球サミット”で生物多様性条約が採択されてから20年余りが過ぎました。岐阜県でも生物多様性基本法の規定により生物多様性ぎふ戦略を策定し、生物多様性の保全と持続的利用を推進しています。

こうした生物多様性への関心の高まりを受け、当研究所では、今年度から導入された「清流の国ぎふ森林・環境税」を活用して「生物多様性に配慮した水田魚道の生態学的評価」という研究課題に取り組んでいます。私たちの主食であるコメを生産する水田、じつは多くの生き物を育む“二次的自然”としても重要な役割があります。例えば、農業排水路で多くみられるフナ類、コイ、ナマズ、タモロコ、ドジョウなどの魚は、かつては繁殖活動や稚魚の成育の場として水田をしばしば利用していました。水田魚道とはこうした魚たちが圃場整備の進んだ水田でも繁殖・成長できるように、水田と農業排水路とをつなぐ簡易な人工構造物のことをいいます。

しかし、こうした水田魚道、“設置すればどこでもOK！”という訳ではおそくないでしょう。なぜなら、設置する農業排水路の環境（標高、農業排水路の大きさ、水流の速さ、二枚貝など他生物の有無など）により、農業排水路から水田へと遡上する魚の種類や個体数が影響されるからです。そのため、水田魚道の効果的な設置のためには、水田を利用する魚たちが生息する農業排水路をいかに予測するかが重要になります。この研究では、農業排水路の魚類相、水田魚道の遡上効果、水田の繁殖・成育効率などを調査し、これらを総合的に評価することにより、水田魚道の有効な設置場所の選定方法や設置された水田魚道の効果的な運用方法などについて検証を進める予定です。

(生態環境部 米倉)



4 カジカ養殖研究会を開催しました

11月28日に下呂支所で平成24年度のカジカ養殖研究会を開催しました。カジカ養殖に取り組んでいる有志をメンバーとするカジカ養殖研究会は、養殖技術の向上や商品化・販売等について意見を交換する会議を定期的に行っています。

今回は、国体関連行事でのカジカのPR活動の報告、飼育水温とカジカの摂餌・成長の関係性についての話題提供、今後の新しい魚種の取り組み計画、最近の養殖生産の近況報告などを題材に、活発な意見交換が行われました。

(下呂支所 藤井)

